

観光フォーラム

Japan and the Culture of the Four Seasons “Introduction: Secondary Nature, Climate, and Landscape” の翻訳とノート

Translation and notes on *Japan and the Culture of the Four Seasons* “Introduction: Secondary Nature, Climate, and Landscape”

竹鼻 圭子

Keiko Takehana

和歌山大学観光学部

I. 日本文化と自然観

日本文化を語るときに、自然や四季との関連がよく議論される。我々の日常を振り返ってみても、四季折々の年中行事や春の花見、秋の月見など、現代生活にも四季が反映されている。一方で、人の営みと自然とが共生する場として認識される「里山」という概念も、現在においても有効な概念として生きている。最近では「里山資本主義」（藻谷 2013）という造語が作られ、マネー資本主義の対局としての社会活動として紹介されている。このような造語が生まれ、人々に容易に理解される素地があることになる。他方、19 世紀に日本文化に触発されたヨーロッパの文化運動がある。フランスを中心に起こったアール・ヌーボー、ジャポニズムや英国のアーツ・アンド・クラフツ運動などである。このアーツ・アンド・クラフツ運動を起こしたウィリアム・モリス（1834-96）が彼の著書『ユートピアだより』の中で、自然と調和した世界を描いている。主人公が目覚めた世界は 22 世紀のロンドンという設定で、そこは緑にあふれ、澄んだ水が流れ、「仕事が喜びで、喜びが仕事になっている暮らし」が描き出されている。自然との調和と共生が生活の理想とされているのである。

このような四季や里山、自然との調和や共生といった概念がいつどのように形成され今日に至っているのかについて、ここではハルオ・シラネ（1951-）の *Japan and the culture of the four seasons* を取り上げ、「序」“Introduction: Secondary nature, Climate, and Landscape”を訳出した。シラネのこの研究は観光分野と多方面にわたって関係すると考えられ、この本の「序」には研究の要点がまとめられているからである。観光学の視点から見ると、この本においてシラネの提唱する二次的自然（secondary nature）は、様々な観光現象に反映されていると考えられ、例えばマス・ツーリズムの名所観光や花見

や紅葉見物から、ホエールウォッチングや里山体験のエコ・ツーリズムまで様々な形態が指摘できる。

この内、ホエールウォッチングに関連して、Wearne（2016）にも指摘されているように、日本の捕鯨、中でも和歌山県太地町のイルカ漁が国際的な議論となっている。この点についてはシラネの室町時代の「供養」の議論などから、日本人と自然との関係性をより広く、深く理解できる可能性があり、インバウンドの観光形態に一石を投げえるかもしれない。太地町の古式捕鯨については竹中（2016）に詳しいが、その〔注 14〕にもあるように、江戸時代初期の貞享 5 年（1688）刊行の『日本永代蔵』巻二に太地浦の鯨恵比須神社の様子が描かれている。ここに表された鯨の「供養」や祭りの在り方は、現在まで受け継がれているという。異文化交流の視点からの更なる検討が必要である。

シラネは長年にわたってコロンビア大学において日本文学を研究してきた研究者であるが、*Japan and the culture of the four seasons* は彼の研究の文化論的側面の集大成といえる研究である。この研究によると、日本では古代から 8 世紀の『古事記』や『日本書紀』のころまでは、自然は畏れる対象として描かれており、8 世紀後半の『万葉集』になって、自然との調和が描かれるようになったという。その後、日本文化に四季は浸透し、シラネの言う二次的自然という形で、様々な分野に現れることになる。この二次的自然という現象は早くには 7 世紀には都市部で発達していったとされ、和歌や襷絵、庭や生け花、そして茶の湯にも浸透していった。なかでも和歌は都市部の貴族たちの社交の手段の中核となり、その四季と関連付けられた手法は主な文学、芸術や様々な意匠に影響を与えた。結果的に四季の動植物や気候が高度にコード化されることになっていった。

シラネの研究の核である二次的自然という概念は、必ずしもシラネに限られたものではないが、その独自性を指摘することができる。青木（2014）は、野生の自然を第1の自然、人工的な自然を第2の自然、仮想的な自然を第3の自然としている。そして、神が第1の自然から離脱したときに生み出され、第2の自然の中で、神は絵画やアニメ、漫画、物語、人形などになっていったという。さらに、そこで生み出されたキャラクターがデジタルな情報世界としての第3の自然の中で、再生されることになる。青木は、日本独自の発達をしてきたキャラクター文化あるいは妖怪文化が、土着的近代化に成功した例として、水木しげるの『ゲゲゲの鬼太郎』や宮崎駿の『となりのトトロ』『もののけ姫』『千と千尋の神隠し』などを挙げている。青木の「第2の自然」とシラネの「二次的自然」はいずれも英語では secondary nature となるが、その相違点は、日本文化の歴史の中で位置づけられ変遷してきたものとして、シラネが文献資料に基づいて詳細に分析している点である。

一方でシラネは「結論」の章で、この二次的自然を巧みに取り込むことで、江戸時代以後の都市部の人々に広く受け入れられ発展してきた伝統文化の茶の湯や生け花の現状についても言及している。すなわち、第二次世界大戦以後、茶の湯や生け花を楽しむ人口が激減し、また、その舞台でもあった床の間や畳の間のある居住空間もまた、ほとんど消滅したと指摘しているのである。伝統は革新があって初めて受け継がれていくと言われるが、現代の茶の湯や生け花に求められるものは何なのだろうか。例えば、茶の湯について、千宗屋（2010）によれば、季節感を取り入れることは比較的新しく、利休時代の茶会には季節感はほとんど反映されなかったという（p.195）。まず、何が継承され何が失われてきたのかを検証するために、当時革新的であった利休のわび茶を体系化したといわれる『南方録』（1686から1690年頃成立）にある茶の湯と、現在の茶の湯の在り方との比較対照が必要である。また、『南方録』「滅後」の項に表されている「現実遮断による俗世身分を逆転する思想」（同 p.377）という、近世以後大きく展開した茶の湯の思想性についても今後検討する必要があるだろう。

また、同じく「結論」の章の最後の言葉も忘れてはならないだろう。

この二次的自然という文化が浸透したがために、それに満足して、肝心の自然保護がおざなりになっているのではない。第二次世界大戦後の日本は、決して自然保護に成功してきたとは言えない。例えば、歌枕の景勝地や巨木を保護してきた神社が危機にあっても、「四季」を守っているはずの俳句や様々な伝統文化に関係した団体が、その保護の先頭に立つことはない。したがって、二次的自然の日本文化への浸透を、日本人が自然と親しみ調和していると、勘違いしてきたのだ。（原著 p.219）

日本独自の自然観が、図らずも自然環境の危機を見逃す原因となっているとするなら、立ち止まって考えてみる必要があるだろう。

II. 翻訳：『日本と四季の文化』『序：二次的自然、気候と景観』

日本の文学に四季が遍く織り込まれていることは枚挙に暇がない。『源氏物語』（11世紀初頭）を取り上げると、ほとんど全ての女性の登場人物、例えば桐壺、藤壺、葵の上、紫の上、末摘花、朧月夜、花散る里、などは自然界にあるものや自然現象から名づけられていて、花や植物が大半であり、それぞれ四季のいずれかの季節に関連付けられている。実際に『源氏物語』をしっかりと把握しようとするれば、登場人物の名前だけでなく彼らの登場する場面設定にも関わる広範囲にわたる植物、花々、気候条件や天体に関する文学的含意を理解している必要がある。さらに言えば、こういった自然現象との関連性は、31音節の和歌に仕組まれた連想と密接に結びつけられているのである。

『源氏物語』は実際に日本文化と自然との密接な関係性を示す格好の例としてよく取り上げられる。しかし、『源氏物語』が書かれた時代には、貴族の女性たちは彼女たちを外界から隔絶する何重にも張り巡らされた几帳や御簾、そして襖などの陰から敢えて出ようとすることはなかった。稀にはあるが、周囲にある小高い山や寺社を参拝に出かけたことはあったが、ほとんどの場合、彼女たちが目にする自然とは寝殿造りの住居にある庭園にあるのみであった。そのような自然は住居の内部の絵巻物や屏風絵、引き戸や襖絵などにも取り込まれ、彼女たちが昼夜を問わず書き留めた和歌にも浸透していた。言い換えれば、『源氏物語』や11世紀貴族階級の女性たちの生活の中の自然は、空間的にも心理的にも広く行きわたっていたが、その多くが庭園に精緻に再構築されたものであり、あるいは絵画や調度品、着物や絵巻物などに絵や物語として描き出されたものであった。このように再構築された象徴的な自然をここでは二次的自然と呼ぶが、自然を延長したものである限り、人間の営みに敵対するものとはみなされなかった。事実、このような二次的自然は、平安時代（794-1185）に日本の首都であった平安（京都）の中心に住んでいた貴族階級にとって、遠隔地であり、あるいはほとんど見たこともなかったような原始の自然の代替えにもなっていた。この本では何世紀にもわたってこういった二次的自然が特に都市環境の中でどのように構築されていったのかについて探る。そして奈良時代（710-784）から江戸時代（1600-1867）にかけての日本文化にみられる時間空間の観念を理解する上で、二次的自然が示唆することについても探っていく。

今日でも日本人は自然に対して独自の親しみを持っていて、この自然への親しみが日本文化の大きな特徴であると広く信じ

られている。こういった見方は高度な都市化と技術革新の時代にあって顕著であるが、これを如実に語っている文章がアメリカ合衆国の高等学校で広く使われている、日本の文学と言語に関する教科書に掲載されている“The Special Characteristics of Japanese Literature: Fusion with Nature”（日本文学の特徴：自然との融合）にある。

日本は農耕の国であり、日本人は農耕民族である。農耕は季節や気候に左右されるが、日本の気候は温暖なので、日本はゆったりと移り替わる四季によって特徴づけられる。自然と闘い、征服する西洋人とは異なり、日本人は自然と調和して暮らし、自然と一体になることを望んでいる。

このような風土で生まれた文学は自ずと自然との一体化を強調することになる。まず、古代の日本の和歌は自然の注意深い観察から始まり、感情を表現する手段となった。平安時代には、この傾向は散文にまで広まった。随筆集の『枕草子』が恰好の例である。『源氏物語』でも自然が重要な象徴的機能を果たしている。中世には西行のような歌人が生まれ、自然の意味を問い直した。自然は人間の様々な営みの源であるという考え方は、結果として自然の中に隠棲した作家による隠者の文学を残した。江戸時代の俳諧は自然を抜きにしては考えられない文学形式である。そこで強調された季節の主題は現代の俳句まで続いている。

このような日本文学の捉えられ方は、作者や読者の自然との強い関係を示唆していて、早には紀貫之（872-945）の『古今集』（905年頃）のかな書きの巻頭に表れる。そして、21世紀に至るまで、何世紀にもわたって繰り返されてきた。

芳賀矢一の『国民性十論』（1907）にあるように、このような自然観が明治時代に明確に示されていたことがわかる。芳賀（1867-1927）は東京帝国大学の教授、國學院大學の学長を歴任し、現代日本文学の研究の基礎を築いたが、日露戦争（1904-1905）の直後にドイツ留学から帰国し、次のような文章を書いている。これは4番目のエッセイ「草木を愛し、自然を喜ぶ。」の冒頭である：

〔原文〕気候は溫和である。山川は秀麗である。花紅葉四季折々の風景は誠にうつくしい。かういふ國土の住民が現生活に執着するのは自然である。四圍の風光客觀的に我等の前に横はるのはすべて笑っている中に住民が獨り笑はずには居られぬ。Vice Versa 現世を愛し、人生生活を樂しむ國民が天地山川を愛し自然にあこがれるのも當然である。この點に於ては東洋諸國の民は北方歐人種などに比べれば天の福德を得て居るといつてよらしい。殊に我日本人が花鳥風月に親しむことは吾人の生活いづれの方面に於ても見られる。

〔現代語〕気候は温暖で、山河は素晴らしい。四季の景觀は桜の頃から紅葉の頃まで本当に美しい。このような土地の住人たちが日常の生活に心を奪われるのも無理はない。私たちの四方を間近に囲む景觀が微笑みかけてくるので、微笑まない人はいない。この世界を愛し、人生を楽しむ人々は、天と地を愛し、山河を愛し、自然に心を奪われることになる。この点から、北方のヨーロッパ人に比べて、東洋諸国の人々は天の恵みと宝物を得ていると言える。特に私たち日本人が花鳥風月に親しんでいることはどのような方面にも見られる。

芳賀は日本人、あるいは日本の特徴として自然への敬愛を取り上げていて、この点が、自然に対するこのような姿勢を持たず、自然と闘い征服しようとする西洋の人々との相違点であるとしている。明治期の先駆的な俳人であった、正岡子規（1867-1902）や高浜虚子（1874-1959）のように、芳賀は自然への敬愛と広く親しまれている和歌や俳句とを結びつけて考え、このような詩歌が自然への敬愛と親近感を体現したものであるとした。このような日本文化の見方は、戦前戦後を通じて弱まることはなく、西欧の日本文化研究に浸透していった。

芳賀の立場は、日露戦争後に起こった美意識のナショナリズムを反映しているが、ヨハン・ゴットフリート・ヘルダー（1744-1803）の気候から国民性がわかるという考え方に影響を受けている。一方でこの立場は和歌に関する最も影響力のある言葉である、紀貫之の『古今集』の冒頭の言葉に始まる長い伝統にも立脚している。

〔原文〕やまとうたは、人のこころをたねとして、よろづのことはとぞなれりける。世の中にある人、ことわざしげきのなれば、心におもふことを見るものきくものにつけていひいだせるなり。花になくうぐひす水にすむかはづのこゑをきけば、いきとしいけるもの、いづれかうたをよまざりける。

ちからをもいれずして、あめつちをうごかし、めに見えぬおに神をもあわれとおもわせ、をとこをむなのなかをもやはらげ、たけきもののふの心をもなぐさむるはうたなり。

〔現代語〕和歌は、人の心をもとにしてたくさんの言葉となったものである。この世に生きている人は、なすこと、することが多いので、心の中で思うことを、見たり聞いたりすることに託して言い出したのである。花の間で鳴く鶯や水の中にすむ蛙の鳴声を聞くと、この世の中のあらゆる生き物が歌を詠まないではいられない。

力をも加えないで、天地を振動させたり、目に見えない鬼や神を感動させたり、男女の間柄を親密にさせたり、勇ましい武士の心をもなごやかにしたりすることのできるのは歌である。

「仮名序」は自然の主な役割として、詩歌への刺激となり、また人間の思考や感情の表現手段となることを強調している。また、人間と自然との密接な関係や詩歌の成り立ちの普遍性、そして歌が社会に調和をもたらす力があることを強調している。これらは、和歌を基本とした自然観という神話の基本的な要素となっていた。確かに、「自然」を表すものとして鶯と蛙が挙げられていて、いずれもが平安時代の貴族階級から優雅な（春の）季節を表す主題と考えられていて、音（鳴声）と関連付けられている。

12世紀には、おそらく当時最も有力な歌人であった藤原俊成（1114-1204）が歌学書『古来風躰抄』（1197）において自然を基とした和歌を、更なる段階へ導く役割を果たした。

古今集の序にもあるように、和歌は人の心をその種にして数えきれない言の葉に育つ。したがって、和歌なしでは春の桜を探し求め、秋の紅葉を見ても、だれも香りにも色にも気づかないだろう……。月日がたち、季節が移り変われば、詩歌の言葉や印象に心を止めて、歌の価値を見出したような気分になる。

紀貫之が、自然が感情や思考を明確に表現する重要な手段であるとする、感情表現モデルを完成させたとするなら、藤原俊成は、自然を基とする歌の知識によって人間が自然を見、反応し、その色や香りに気づくのだとする、非常に影響力のある認知的、文学的モデルを完成させたことになる。この視点からすれば、和歌は我々を育て、自然に対して反応する心を与えることになる。

紀貫之から芳賀矢一まで、人間と自然との密接な関係を語るとき、何世紀にもわたってあらゆる教養人たちの社会に浸透していった自然観について語っているのであり、やがて国民性として捉えられるようになった。自然との調和と国民性とを関連付ける傾向は平安時代に既に現れていた。和歌の文字表記は「大和、倭の歌」を意味し、当初は奈良盆地を表していたが、平安時代になると「大和の国」、つまり当時の日本を意味するようになった。「和歌」の「和」は柔らかさ、あるいは優しさを意味するようになり、調和を含意した。このような意味づけは、藤原清輔（1104-1177）が歌学書『奥義抄』（1135-1144）において展開し、藤原定家（1162-1241）が歌学書『毎月抄』において明確に論じた。

そもそも、歌は和の国である倭国における古の文書の大家が表した一形式であって、歌は優雅で感情を揺り動かすような作風でなくてはならないと繰り返されてきた。まことに、歌は我が国特有のものであり、先人たちは歌学書に、歌は優美さそのもののあわれを歌うべきだと書き記してきた。どのように恐ろしそうなものであったとしても、和歌に歌うときは柔らかで優しくなくてはならない。本来優しい桜や月を取り上げ

ながら、恐ろしそうな歌を作るとは一体どういうことなのか。

優しく深く感情を動かす和歌の神髄は、全てにおいて調和のあるこの国の一文学形式だということである。言い換えれば、優しさと調和が高く評価されているということである。強調されているのは自然そのものではなく、自然のあるべき姿である。特に和歌において自然は、柔らかで優しい形でなくてはならないのである。

自然を調和や親密性、あるいは世界を見る手段と捉える伝統は、貴族階級の都を中心とした文化と首都で生まれたジャンル、特に主に和歌によって形成されてきた。同様に、和歌が都会型のジャンルであり、都市で生まれ教養あるエリートたちの社交の手段となっていたこと、そして屏風絵、寝殿造りの庭園、貴族階級の女性の着た十二単など、都で生まれた都市型の関連する他のジャンルと共存していたことは重要である。このようなジャンルやメディアは、中世（1185-1599）になって生け花や盆栽や茶の湯を含むようになったが、自然を優しい形に再構築し、私の言う二次的自然を作り出し、やがて都市住民にとってより手つかずの自然の代替えになっていった。現在の批評家たちによって、日本人の自然との親密性や調和と呼ばれるものは、この本で示すように、多くはこの二次的自然の普及の結果であり、近代以前のほぼ全ての文化形態に影響を与えた。

1. 気候と文化的反転

平安時代の和歌とその関連分野で発達した四季の文化は、日本の気候を反映したものであると同時に、反転したのもでもあった。冬には、日本の本州はバルト海からモンゴルにかけて広がる寒気団の影響を受ける。寒気はシベリアから南に移動し、日本海を横断するが、北へ移動する湿った空気に流れ込み、日本アルプスに当たって、多量の降雪をもたらした。その結果、日本は世界でも有数の豪雪の国であった。夏には、現在、小笠原高気圧と呼ばれる熱帯気団に覆われて、南東の太平洋からの高温多湿がもたらされた。日本の本州はしたがって、夏と冬ともに多量の降雨や降雪があった。実際、夏の間の降雨量は、どのような熱帯の国々にも匹敵した。現在も原生林が保たれている奈良の春日大社の裏にある常緑広葉樹の森は、熱帯ジャングルと同様、密生した常緑の檜の木と、その根を覆うシダや蘭が自生している。その結果、日本は様々な植物や動物の自生地となっていて、例えば、常緑広葉樹、密生した笹、棕櫚、そして猿などは通常は熱帯地域のものである。後述するが、京都や奈良の湿度の高さが、天候の状態に重きを置いた歌の文化を養った。霞は春を表し、モンスーン性の梅雨は夏の特徴であり、秋には霧や露、そして台風が訪れ、冬の極め付けは雪と霜であった。

言うまでもないが、気候は地理的地域性や、歴史的時代によって異なる。明治時代には太陰暦が使用されていたが、春

は1月から3月まで、夏は4月から6月まで、秋は7月から9月まで、冬は10月から12月までであった。現代の太陽暦によって、21世紀の初頭に置き換えると、伝統的な四季は次のようになる。

春	2月4日から5月4日
夏	5月5日から8月6日
秋	8月7日から11月6日
冬	11月7日から2月3日

現代以前の暦から現代の暦に置き換える作業は複雑である。太陰暦には1か月増える閏年があり、その年には1年が13か月になる。しかし原則として、およそ5週間から6週間を太陽暦から差し引けば、太陰暦のほぼ同じ季節になる。

昔の京都の住人の太陰暦で1月から3月に当たる春は、現代の2月中旬に訪れた。北部ヨーロッパや北部アメリカ合衆国では、春は比較的遅く、3月に植物の芽吹きとともに訪れる。対照的に、京都では2月10日頃から春の霞が山々にかかり、枯野には草の新芽が芽吹く。桜の開花は、平安時代以後今日まで春の象徴であるが、現代の4月中旬に訪れる。史的記録によると、京都近郊の桜の満開の標準的な時期は、11世紀から13世紀では4月17日となっている。

太陰暦の4月から6月に当たる夏は、現在では5月5日に始まり、8月6日に終わる。京都や奈良の夏は非常に暑く、多くの東南アジアと同じか、あるいはそれ以上に高い気温になる。気温は8月には華氏90度（摂氏36.6度）まで上がり、梅雨には湿度が65パーセントまで上がる。太平洋から来た南方暖気団の前線が北へ移動して本土を覆うと、初夏のさわやかな空気が突然湿気を帯び、梅雨が訪れる。梅雨は京都では6月10日ごろから7月中旬まで続く。その直後、梅雨明けと呼ばれる暑く乾燥した天気を訪れ、7月中旬から8月の最初の週末まで20日以上も続く。夏の雨量が多いので、水稻農業が盛んだが、山地の多い国なので、洪水や地崩れも起こる。日本の梅雨が特徴的なので、風土学者の吉良竜夫は日本には5つの季節があるとした。つまり、春、梅雨、梅雨明け、秋、そして冬である。

現代の暦では、太陰暦の7月から9月に当たる秋は、8月7日から11月6日までになる。秋の初めには小笠原高気圧が南へ退きはじめ、大陸からの涼しい風がもたらされる。しかし、気候は暑いままで、8月の第3週までは長々と夏が続く。京都の夏は台風の季節とも重なり、8月から11月まで続いて豪雨をもたらす。秋の前半はまだまだ暑く、『古今集』の多くの初秋の歌が長々と続く夏を歌っている。太陰暦の8月中旬に当たる9月中旬になって初めて、秋に結びつく台風や涼しさや虫の声が訪れる。平安時代の和歌は秋の悲しい側面と輝かしい側面の両方に焦点を当てた。京都では秋から冬まで続く色鮮やかな紅葉が特に注目された。

日本の春と秋は比較的温暖であり、アメリカ合衆国の大西洋岸中部の春や秋と似ている。しかし、気候風土の視点からすれば、二つの長く厳しい季節に挟まれていることになる。現代の暦では夏は8月6日に終わることになっているが、気象条件からすれば、京都の夏は少なくとも8月末まで続く。梅雨と梅雨明けを8月の暑い気候とつなげれば、夏はおよそ1年の3分の1続くことになる。こういった広い視点から見ると、春と秋は寒い大陸性の気候と暑い太平洋性の気候の移行期の季節ということになる。このような厳しい気象条件は、日本の気候が温暖で優しく調和がとれているという広く信じられている見方とは著しく対照的である。実際の気象条件を反転させることで、奈良時代と平安時代の貴族文化は春と秋を最高の季節とした。この最高の季節が、古代の中国同様に、文学や視覚を楽しませる芸術で謳歌され、その周りに幅広い宗教的、社会的、文化的付随物が発展していった。実際の気候と和歌の四季の文化との間の分裂について、様々な現象を追うことができる。

まず、784年以前の古代および平安時代の日本文化は奈良盆地と京都盆地に位置しており、日本の他の地域に比べて冬季は比較的温暖であった。和歌や日本の古典、例えば『古今集』、『伊勢物語』（974年ごろ）や『源氏物語』の「自然観」は、ほぼ全てこの二つの内陸盆地の気象条件を反映している。その結果、日本の古典文学に描かれる冬は穏やかで、優しく降る雪は豊作の前兆とされ、幸運な季節とされた。本州の他の地域、特に日本海側や東北地方では、雪は厳しい災いと考えられていた。日本海に面し、雪国と呼ばれる地域の厳しい雪は和歌や古典文学には描かれていない。19世紀初頭、信州（長野県）出身の百姓であった、俳人小林一茶（1763-1827）などによる俳諧が台頭して初めて、詩歌に豪雪が表現されるようになった。

次に、古代から中世にかけての京都の夏は、実際には酷暑と疫病と死の季節であった。その結果、祇園祭や葵祭のような地域や都を代表するような祭りや、地方の祭りなどが数多く催されるようになり、神を鎮め、罪や悪霊を祓い清めようとした。例えば、京都の有名な祇園祭は、太陰暦の6月前半に行われたが、梅雨明けの一番暑い時期に当たり、平安中期に祇園神社の神に疫病や自然災害からの加護を祈って始まった。このような夏の否定的な側面は和歌の主題として適切ではないとされ、ほとんど和歌に歌われることはなく、特に、国と宇宙の調和を表明することを意図した勅撰和歌集の主題となっていない。このように平安時代の宮中の和歌は実際の気候を反映していたわけではなく、今後見ていくように、高度に美学的で思想的な四季の抽象化を創出することにになる。『古今集』のような勅撰和歌集は、貴族階級の基準にかなう四季のもっとも素晴らしい側面を選び出しており、中国の古典文学に先例のあるものも多かった。『古今集』では春と秋に重きが置かれて、それぞれ2巻から構成されており、夏と冬につい

ては短い巻が1巻ずつあるのみで、自然を楽園と見る考え方が反映されている。

最後に、夏と冬は不愉快で困難な季節ではあったが、貴族階級の歌や文化は実際の自然ではなく、あるべき自然を追い求めた。例えば、日本の詩歌、つまり和歌や連歌や俳諧のもっとも重要な夏の主題は夏の夜であり、涼しさと暑さからの解放をもたらしたが、あまりにも短いとされた。江戸時代では、連歌の発句が涼しい住まいを示唆することで、亭主への敬意を表した。日本の伝統的な和菓子や生け花や茶の湯、そして枯山水や寝殿造りの建物や書院造の住居は全て涼しさを感じるような意匠になっているが、特に日本の中央では夏が殊のほか暑く湿度が高いからである。『南方録』（1593）に千利休（1522-1591）の茶の湯に関する言葉として「夏はいかに涼しきやうに、冬はいかにあたたかなるやうに、」とある。言い換えれば、都において二次的自然は言語的、視覚的、触覚的、あるいは食物を通じて理想的な環境を作り出す機能を持っていたのである。

2. 地方の農村

日本文化には二次的自然の基本的な形が明らかに二種類ある。すなわち、貴族によって都（平城京〔奈良〕と後の平安京〔京都〕）で発達した形と、「里山」と呼ばれる形で、平安中期から後期にかけて荘園の農村で始まった形である。荘園は初期には貴族や寺社や皇族によって所有され、庶民や下級侍によって耕作されていた。この二種類の二次的自然の形は平安時代と鎌倉時代（1185-1333）の各節目で交差し、室町時代（1392-1573）になるといくつかの文化的ジャンルで重なり合うようになる。

古来、日本人は荒地を開墾して水田にすることに勤しんできた。新田開発は地方の荘園体制にとって最も重要なことであり、古代から始まり、平安時代から中世後期まで続いた。荒地を水田に開墾するに当たって、耕地を作るために躊躇なく巨木を伐採し、森林を一掃し、動物を殺傷した。地方の風土記が描いているように、人の手の入らない自然は、荒ぶる神の領域と考えられていた。肥前国風土記のサカノ郡の節には、サカ川流域の耕作を阻止した神についての記述がある。

その国の西部には川があった。名をサカ川といった。川には鮎がいた。その川の源は国の北部の山中にあり、南へと流れて、海へ流れ込む。川の上流には荒ぶる神があって、やってくる人々の半数は生かすが、半数は殺した。

同様の例として、古事記や日本書紀の川に住む蛇があり、作物を破壊し、毎年村の娘を生贄とした。スサノオノミコト（素戔鳴尊）が退治したとされるその蛇は、水稻農業にとって洪水や川の氾濫が脅威であったことを示している。スサノオノミコトは治水の困難な河川の水をコントロールする能力を象徴して

いる。古代の年代記や風土記が示唆しているように、自然の荒ぶる神と人間の世界は隔絶していた。そのため、人々はこういった荒ぶる神々を敬い鎮めるために、山々の麓に神社を建てたのである。

平安中期から後期にかけて、自然に対する姿勢が著しく変化した。飯沼賢司が考古学の発掘調査から示唆しているように、それまで農地の開発を阻止し、妨げていた荒ぶる神たちが米作農業の神へと変化したのである。神々は水や堤や灌漑の神になり、あるいは村落を守る鎮守になって、田遊びや豊年豊作の祈りを通じて崇められる存在となった。神々を祀る神社は、それまでは村落の周辺部にあったが、そのころから荘園の領地内に建てられるようになり、人間の視点からは自然とのより協調的な関係を象徴することとなった。この変化はまた、自然への技術的コントロールが拡大したことを反映しており、特に水利や灌漑の技術は進んだ。

こういった環境は現在の環境保護運動で「里山」と呼ばれるものの起源となったが、20世紀に至るまで続く生態系となっている。村の住人たちは、水田の灌漑となる河川に隣接して暮らし、水田から収穫するだけでなく、周辺の草地や林からも収穫を得た。そこからは水田の肥料、牛馬の飼料、建築用材、燃料としての薪や松葉が供給されたのである。中世の説話や民話では、例えば木こりのような登場人物が「山に柴刈りに」行くのが典型的だが、この意味は林や森に入って、薪を切り、下草や落ち葉をかき集めて肥料にすることである。里山は、水田と周辺の山が常態的に収穫され再利用されるという意味において、二次的自然の一形態となったが、都の二次的自然とは基本的に異なっていた。都のそれは、優雅で物理的に小型で、鳥や虫に注目し、色や香りに興味が向けられていた。

宇治拾遺物語（13世紀初頭）の説話「田舎から来た小坊主が桜の花が散るのを見てたいそう泣いたこと」（1:13）は農村と貴族の社会との自然に対する姿勢が異なることを際立たせている。

また、昔々、田舎から来た小僧が比叡山の僧院に入ったのだが、桜が満開で美しいある日、強い風が吹いているのに気づいて、大声で泣き出した。彼を見た僧侶が近づいて尋ねた。「一体何を泣いているのだい？桜の花が散っているのに泣いているのかい？桜の花は長く咲くことはなく、すぐに散るものだ。それだけでなく、桜が散るのを止めることは誰にもできないのだよ。」「そんなことで悲しんでいるではありません。」と小僧は言った。「私が悲しんでいる理由は、父の麦の花が散れば、穀物が実らないと思うからです。」そして、しゃくりあげては、大声で泣いた。まことに、物事を大げさに考えすぎではある。

この物語は、僧侶の貴族的な和歌を基本とした自然観と、農民の息子の自然観とを面白く対比している。僧侶は花の咲い

た桜の木を愛で、花が散るのを悲しんでいる。それに対して、小僧は麦がどうなるかのみが心配なのであり、麦は当時の村の農民の暮らしにとってなくてはならないものだったが、和歌や宮廷物語に語られることはまづなかった。

このような二つの自然に対する基本的な姿勢は、ジャンルの違いとして表面化する。一方は和歌を基本としたジャンルで、平安時代の宮廷物語や日記であり、他方は古代の記紀や風土記や説話や軍記物などである。歴史物語や説話集、例えば『日本霊異記』や『今昔物語』などは、犬、狼、狸、狐、猫、虎、熊、馬、牛、鹿、猪、羊、ムササビ、鼠、兎、猿、象など、多くの動物たちを描かしている。多くの動物が食物として狩られたり、農業に使われたり、あるいは里山に生息したりしていた。これとは対照的に、勅撰和歌集や宮廷物語では動物の世界はほとんど猫などのペットや、鹿や、鶯や、鳴く虫などに限られていた。宮廷の和歌では自然は優雅な世界であり、野生動物や農業用の動物に重要な役どころはない。結果的に自然界と人間界とに親密な調和がもたらされ、それぞれがお互いのメタファーとして機能するようになった。和歌に登場する鳥や虫や鹿は語彙的関連性（例えば、松虫を「待つ虫」と関連付ける）やその響きが称賛される。頻出する「なく」という動詞は、「鳴く」と「泣く」のいずれの意味にもなることが示しているように、これらの動物は内面の感情を外部に具現化したものなのである。説話や軍記物は貴族や教養ある僧侶によって書かれたり、編集されたりしたので、ある程度までは里山のイメージが宮廷文化の洗練を受けたが、自然に対する姿勢や捉え方の違いは明確である。

言うまでもないが、平安時代や中世の農民たちは、歌や絵画や庭を楽しむような贅沢はしなかったし、茶の湯や生け花などの文化的な活動もしていなかった。つまり、和歌や宮廷文学に見られる、牧歌的モードと呼んでもよい、ロマンティックな山里と、農村の実際の生活の間には明らかに相違があった。静寂の空間として描かれる和歌の様式の山里とは対照的に、説話や貴族文学以外のジャンルでは、田舎の農民は地震や洪水や干ばつや疫病や飢餓など、ありとあらゆる災害に頻繁にみまわれる。和歌の優雅な世界に登場する虫や鳥とは異なり、ほとんどの虫や鳥は米を食い荒らすとして、害虫や害鳥と考えられていた。田を荒らす虫や動物を農民は殺さなければならなかった。この結果、殺した動物や虫の霊を祭る慣わしが広がった。逆に、日本を「あきず島」の異名で呼ぶ基になったトンボなど、穀物を守る虫や、虫を食べる虫は崇められた。

日本の民俗学者が明らかにしているように、「虫送り」の長い伝統がある。作物に害を与える害虫を駆除するために、農村の人たちは松明に火をともし、鐘を鳴らした。また、「虫供養」も続いて行われた。同様の「供養」が鯨や魚、猪や鹿や狩りの獲物のために執り行われた。数多くの中世の説話や御伽草子や能の演目が、この自然を制御する必要性、特に害になる動物や虫を狩りとり、殺し、森林を伐採しなければならない

という苦悩と、神々が鎮座する世界と信じられていた自然を鎮め崇める願望との根本的な対立を露わにしている。日本に動物の殺生を禁じる仏教が広まった後、この緊張関係はますます複雑になった。

3. 各章の方向性

この本の論点は、よく言及される日本人と自然との「調和」は、地勢や気候で決定づけられる原始の自然との固有の緊密性ではなく、早くには7世紀の大都市圏を基盤に構築された二次的自然との密接な関係の結果であるという点にある。この二次的自然は数々の形式を生み、歌、襖絵、庭、生け花、茶の湯など様々なジャンルに見ることができる。和歌がその萌芽の重要性を担っていて、都の貴族階級の社交の基本となり、和歌に表現された季節が日本のほぼすべての文学、芸術、意匠の形式やジャンルに影響を与えた。和歌のこのように強力な影響力によって、四季の動植物や気候が強力にコード化された。例えば、五月雨や梅雨は憂鬱や倦怠と関連付けられ、秋露は涙と結び付けられた。このような連想は、日本で生まれたものもあるが、例えば秋露と涙など、多くは漢詩からの引用であった。その漢詩もまた、奈良時代や平安時代に広く詠まれた。

第1章「和歌の主題と四季の成立」では次のような論点が検証されている。まず、和歌の四季の主題が『万葉集』（759年頃）においてどのように成立していったか。また、『古今集』のような勅撰和歌集において四季の主題がどのように中心的な主題となっていたのか。そして、初期の奈良時代から平安時代にかけては春秋が主な主題であったのが、その後、冬が主題となるようになり、中世のもっとも好まれる主題になっていったのか。つまるところ、それぞれの四季の主題は、特定の文化的な関連性を生み出していき、詩歌だけでなく平安時代の屏風絵や絵巻に始まる関連する様々なメディアで、自然を強力にコード化していったのである。『古今集』においては、和歌の二本の主要な柱である恋の主題と四季の主題とが密接に関連付けられるようになり、自然が個人の感情を表現する重要な手段となっていた。

『古今集』は最初の勅撰和歌集であるが、約45の季節の主題を歌っている。時を経て、正当な和歌の主題は次第に増えて、8集目の勅撰和歌集である『新古今集』では約60になった。そしてこのような和歌の主題とそれから連想される事物の体系が、室町時代に絶頂期を迎えた中世の和歌や連歌の基礎となった。平安中期から後期にかけて、歌人たちは年中行事や天体（特に月）や気象条件や夜明けや夕方のような時間帯などを強調するようになった。季節の主題と和歌の用語、そして自然のモチーフが表現の複雑な体系を構成した。そして主題やイメージやそれに関連する事象が、恋や政治的抗議や個人的な嘆きなど、広範囲な目的に使用される豊かな「文化的語彙」として機能したのである。

第2章「絵画、和歌、連歌」では、和歌のビジュアルな文化への影響について観察し、季節の主題とそれから連想される事象が様々なメディアにどのように表れているか検証している。この現象は、平安時代の十二単や襖絵に始まり、中世の茶器、そして江戸時代のカルタまで広まった。十二単は色彩を通して、文字通り女性の身体を自然と季節とで包んだ。平安時代の貴族たちは歌と絵画で構成される四季と名所の絵画に囲まれていた。十二箇月を月ごとに描いた絵画が発達すると、自然と四季との関連性はますます洗練され、特定の鳥や花が特定の月に結び付けられた。名所もまた特定の季節や自然のモチーフと結び付けられた。例えば、竜田川は『古今集』の一連の秋の歌で有名になったが、美しい紅葉と結び付けられ、絵画や焼き物、漆器や衣服の水と紅葉の組み合わせが竜田川を暗示するまでになった。和歌にはこのような力があったので、茶の宗匠たちは和歌の句を茶器の銘に使い、簡素な物に歌と季節の連想を与えた。

このような和歌の伝統は連歌に受け継がれ、室町時代の主要な歌のジャンルになった。連歌は、和歌で発達した季節の連想を伝えただけでなく、より洗練され、季節の主題を特定の月や季節の句と結び付けた。それぞれの発句と対句の組み合わせは、一つの歌としてともに詠まれるが、季節あるいは季節外れの語によってまとまりを持ち、連歌は参加者たちが四季を旅する手段となった。和歌集と同様に連歌もまた三才、つまり天地人と呼ばれる宇宙の体系に従っていた。三才は自然と人間とを直接結び付ける地勢と宇宙の秩序を作っている。連歌の教本は季語やその連想語を並べているが、和歌の季節の連想を能に吸収する導管の役割を果たした。能は室町時代に脚光を浴びるようになり、平安時代の古典を、新しく台頭してきた武士階級に再構築していった。山水画は中国の宋(960-1279)から輸入され、室町時代に広まったが、連歌は水墨画に描かれた山水も取り入れた。遠景の山々と水の広がりとは日本の歌の不可欠な風景となったが、枯山水や盆石、そして禅の水墨画も同様であった。

このような二次的自然はまた、中世の邸宅の内部の装飾になっていったが、床の間に飾られた生け花や他の芸術品などに顕著に表れる。第3章「軒下文化、花と行事」では、屋外を屋内に結びつける建築様式や、やがて室町時代になると生け花や盆栽の形で庭や草花が邸宅内部に取り込まれていったことについて検証する。平安時代の寝殿造りは、柱が開放された構造で、屋内を直接庭へ開放していたが、この様式は室町時代の書院造に受け継がれた。書院造の特徴は床の間であり、縦長の開放された空間に様々な芸術品が飾り付けられた。例えば、茶の湯のしつらえ、絵画、連歌や和歌や漢詩の墨蹟、香、そして生け花などである。室町時代から初期の江戸時代にかけて、立花が、それ以前には和歌が担っていた社交や優雅な挨拶や季節の寿ぎや祈りなどの、社会宗教的な多くの機能を果たしていた。室町時代には枯山水が

広まって、花をほとんど使わなくなったので、文字通り花は室内に取り込まれた。しかし、江戸時代になると、生花が都市の庶民や上級の侍の庭に戻ってきた。彼らは、平安時代の主流であった桜や桃、藤や橘などの木性の花よりは、菊や朝顔などの草花を好んだ。春の桜と秋の紅葉、そして冬の月は、変わらず名所と呼ばれる各所での主な娯楽であった。そのような名所は、物見遊山の願望にこたえて、江戸(東京)や京都の内部や周辺に作られていったが、都市の庶民にとって主要な娯楽になっていった。

第4章「里山、社会階級と対立」では、首都の和歌を基盤とした二次的自然と、記紀や、説話、軍記物や室町時代の御伽草子のようなジャンルに描かれている、農業を基盤とした里山の二次的自然とを比較対照して考察する。山麓の川に隣接した農村の里山の景観の特徴は、神々は自然の様々な様態に存在し、鳥や動物たちは、山中や山の向こうに存在する神々や死人の異界と、この世との仲介の役割をはたすという信仰であった。中世にはこの二種類の景観はかなりの頻度で交差した。最も顕著な例が能であり、室町時代に始まり、その上演目録には木や植物に関する数多くの演目が含まれるようになった。意義深いのは、こういった演目は、桜や藤のような、本来和歌に歌われた季節の主題やイメージから成り立っているということである。しかし、人間心理の優雅なメタファーとは異なり、能の演技の焦点は植物や花の霊に当てられ、人間と同様に、この世への執着と救いへの希求の間の仏教的葛藤に苛まれる。その当時の御伽草子の多くと同様に、このような演目は、多くの場合、人間の手によって犠牲になったり苦しんだりする植物や動物の目線から世界を見ている。

和歌に歌われる自然は、一般的には季節性や無常と関連付けられている。しかし、第5章「四季の超越、霊力と景色」が明らかにしているように、魔除けの機能や、松、竹、鶴、亀などの自然のイメージと時間や季節を超越する能力とを関連付ける超季節性もまた、文化的な特徴である。奈良時代には、『万葉集』の歌にあるように、花や緑の植物の形をとった自然は、魔除けの機能を持っていて、疫病や汚染や死などの悪霊を除き、豊作や健康や長寿などの幸運を祈った。このように自然は、ときには慈悲的であったり敵意を露わにしたりする神々と人間との間の仲介という重要な役割を果たしていた。若菜摘みや根引きの松といった貴族の春の行事は、都市の内外の野にある自然を通して、年ごとの再生を祈願するものであった。和歌や屏風絵は、長寿を象徴する松や鶴を大陸風のイメージで取り上げた。勅撰和歌集では、魔除けや季節を超越した主題は「賀歌の巻」に集中する傾向にある。現代の日本の国歌は、自然の永遠性を詠んだ『古今集』の賀歌に基づくものである。里山では、魔除けの機能は、村の神社や祭り、そして田遊びのような祈りの形をとったが、このようにして、守護することもあれば、破壊することもある農業や自然の神々に敬意を払ったのである。季節の超越性や魔除けの主題は

広範囲のジャンル、例えば能の脇能（神能物）や室町時代の民話の祝儀物などで重要な役割を果たしている。魔除けの機能や季節の超越性には、地形学的な表現もあって、奈良時代以後では寺社や寝殿造りの庭に見られる海に浮かぶ島々の構造や、平安時代から江戸時代にかけて理想郷のイメージとなった四方四季の庭に表されている。このような自然のイメージは全て都市部で再構築された自然であるが、荒々しく思いのままにならない側面を持つ自然からの絶え間ない脅威と、対抗する防御の必要性を暗示している。

第6章「年中行事、名所と娯楽」では、特に宮中で発祥した年中行事が、和歌や関連分野の表現に果たしていた重要な役割について検証する。宮中発祥であれ、地方の発祥であれ、ほとんどの年中行事は魔除けの機能があり、通常は悪霊を祓い、健康長寿と豊作を祈願した。例えば、早春は若菜と関連付けられるようになったが、若菜は若返りと新生を祈って、野で摘まれ、調理して食べられた。五節句は和歌の季節の主題として欠くことができない。このような宮廷の年中行事は、多くが中国の慣例に基づいているが、土着の発祥で水耕農業に関連した農村の年中行事とは明確な違いがあった。農村の例として、米の豊作を祈願する田遊びがあるが、年初に行われ、農民たちが寺社の敷地を田に見立て、田を鋤ですき、苗を植え、害鳥を追ったりして豊作を祈願する。江戸時代になると、歌舞伎などの技能や演劇の集団ごとに独自の年中行事を行ったが、全体として大きな四季のサイクルに文化活動が統合されていくことになった。

自然との接触を通じて新生を願った古代の儀式は、共同体の娯楽や息抜きへと発達していった。広範囲に広まった花見の習慣に例をとると、貴族の間で始まって、室町時代や江戸時代に都市部の庶民に広まったのである。都市部での二次的自然のこのような側面は、18世紀の「名所」の急速な発展に顕著であるが、春の桜や秋の紅葉のような伝統的なモチーフが中心となっていて、都市の庶民の物見遊山の格好の目的地となった。

江戸時代に自然の異なる表現や機能と四季とがどのように交差し発展していったのかが、第7章「四季の階層性と風刺、園芸」の主題である。江戸時代を代表する詩歌のジャンルである俳諧は、和歌によって発達した季節の連想を受け継ぐとともに、長く継続してきた慣例に面白さの要素を導入して、古典の伝統から脱却した。俳諧は、和歌や古典文学を、都市の庶民や教育を受けた農民に受容可能なものにする重要な役割を果たし、四季の文化を庶民にまで広げた。俳諧を詠む過程で欠かせない、語法や詩的連想を弟子たちが吸収できるように、俳諧の師匠たちは『古今集』や『伊勢物語』や『源氏物語』などの平安時代の古典を注解付きで編集し、出版した。同時に、俳諧は自然の景観を拡張してハエや食べ物も含め、春に鳴声を上げてつがう猫の恋のような、ユーモアのある季語を加えていった。高度に成文化され優雅で調和のと

れた自然観を作り出してきた和歌や連歌とは対照的に、俳諧は漢文からの借用語や土着の語彙や古典の語彙のいずれも用いて、和歌の優雅な世界と庶民の日常との間の分裂に戦いを挑んだ。俳諧は主に次の二方向へ進んだ。

1. 高尚に低俗を求め、洗練された春画と同様、日本や中国の古典の主題を風刺的に模倣し、通俗化した。
2. 同時代の卑近な低俗に、精神的な含意や詩的深遠さといった高尚を求めた。松尾芭蕉（1644-1694）の俳諧に見られる。

類似した方向性が浮世絵にも見られ、鈴木春信の『座敷八景』（1766）は古典の『近江八景』を風刺的に模倣している。つまり、四季の文化は広範囲に広がり、形式も多様で、大衆文化に浸透し、様々なメディアやジャンルで表現されたのである。

江戸時代には、和歌の世界ではほぼ取り上げられなかった二つの主題、すなわち魚と食べ物、特に野菜が季語になった。懷石と和菓子の形で、茶の湯は食べ物を芸術のレベルまで押し上げ、四季の文化の一部になっていった。奈良と京都という内陸から、大阪と江戸の湾の文化へという地理的移行に伴い、魚と貝が日本の詩歌とビジュアルな文化の重要な要素となり、江戸中期から花鳥画浮世絵に見られるようになった。注目すべきは、植物や陸生動物の描写と同様、魚の描写も本草学の影響を受けたことである。このことは俳諧や狂歌の本にある自然の描写に劇的に示されている。俳諧の歳時記は江戸時代の百科事典的なハンドブックとなったが、虫や爬虫類、鳥や哺乳類に新たな動物学的範疇を作り出し、動植物を念入りに観察する本草学に依拠していた。18世紀の後半に大衆に広まった狂歌絵本では、魚や植物そして鳥は高度に写実的で科学的に描かれたが、添えられた狂歌は古典の季節の主題を批判的に模倣して描かれた。

総括すると、この本はほぼ時代を追って書き進められていて、8世紀に始まって、およそ19世紀で終わっている。まず和歌を基にし、都を中心にした、様々な文学の分野や媒体に見られる自然観から始まって、特に室町時代にこの自然観が農村の自然観とどのように交差しいったかを分析した。次に、和歌を基にした四季の文化が、江戸時代にたどった運命に視点を移した。すなわち四季の文化は、俳諧によって大衆に広がり、歓楽街の文化に取り入れられ、都市部の庶民の娯楽や新興の名所に顕著に表れ、浮世絵や大衆文化の風刺やユーモアの対象として複雑な機能を果たしたのである。結論の章では、こういった発達がどのような意味を持つのかまとめたが、より大きな歴史的文脈における様々な脅威も取り上げ、このような多層的な四季の文化が21世紀の日本でどのように表現されているかに触れて終えている。

参考文献

- 青木貞茂（2014）『キャラクター・パワー——ゆるキャラから国家ブランディングまで』NHK 出版.
- 芳賀矢一（1907）『國民性十論』富山房.
- 井原西鶴（著）堀切実（翻訳）（2009）『新版 日本永代蔵 現代語訳付き』角川ソフィア文庫、角川学芸出版；新版.
- 久曾神昇（1979）『古今和歌集（一）全訳注』講談社学術文庫、講談社.
- モリス, ウィリアム（2013）『ユートピアだより』川端康雄（翻訳）岩波文庫、岩波書店.
- Morris, William（1994）*News from Nowhere and Other Writings*, Penguin Classics.
- 藻谷浩介（2013）『里山資本主義』NHK 広島取材班、角川書店.
- 西山松之助（校注）（1995）『南方録』ワイド版岩波文庫、岩波書店.
- 千宗屋（2010）『茶一利休と今をつなぐ』新潮新書、新潮社.
- Shirane, Haruo（2012）*Japan and the Culture of Four Seasons*, Columbia University Press; New York.
- 竹中康彦（2016）「江戸時代後期の熊野灘における古式捕鯨の実態について—和歌山県立博物館所蔵『紀州熊野浦捕鯨図屏風』の分析を通じて—」『和歌山県立博物館研究紀要』第 22 号、33-48.
- Wearne, Simon（2016）“Over there and over looked – Mukaijima”, to appear in SICRI *Shima Journal*.